

日本語の会話における 否定的評価の表現を含む発話の機能 —発話のきっかけに注目して—

The function of utterances including expressions of negative evaluation found
in conversations between native speakers of Japanese.
-With regard to the engendering factor of the utterances-

関崎 博紀
SEKIZAKI Hironori

Abstract

This study is a survey on utterances which include expressions of negative evaluation found in conversation between Japanese undergraduate students at Japanese universities whose relationships are very close. The analysis was done regarding the engendering factor and the function of the utterances that are referring to their interlocutors and their actions, utterances, recognition, people or things they like. The influence of gender on the result was also examined.

The result showed that more than 80% of the utterances were uttered in interaction, in which the function that threaten Positive-face (Brown&Levinson1987) were found in more than 70% of utterances, whereas the rest has other functions such as Positive Politeness (Brown and Levinson 1987). This study also revealed differences between males and females regarding the function of the utterances.

1. はじめに

評価という行動は、人間関係を築く上で極めて重要である。なぜならば、評価することは、「特定の事柄に対する話し手の価値観を表すこと」(Martin&White2005、筆者訳)であり、相手との心的距離に影響するからである。しかし、いざ価値観を表そうとする際の表現を考えると、肯定的な評価の語彙は肯定的評価のみを、否定的評価の語彙は否定的な評価のみを表すというわけではない。部屋を見ながら「きれい」と言っても、褒めている場合も皮肉を言っている場合もある。会話の相手に「ばか」と言っても、相手をけなしていることもあれば、親愛の情を表していることもある。評価の表し方を考える上で、評価の表現がどのような状況で発せられ、そ

れがどのような機能を果たしているかを明らかにすることは不可欠である。

本研究では、評価のうちでも、特に日本語母語話者同士による実際の会話に見られる否定的評価を分析する。肯定的評価である「ほめ」の研究が盛んに行なわれているのに対して、肯定的評価の研究に比べて盛んではなく、この研究が、評価行動の全体像を明らかにする上で必要だからである。否定的評価の表現を含んだ発話を、それが発せられた状況の中でも特にきっかけに注目して分析し、発話のきっかけごとに多様な機能を果たしていることを示す。

2. 評価に関する先行研究の概観と本研究の目的

日本語の評価に関連する研究は、肯定的評価である「ほめ」に関するものが盛んに行われ、表現形式を分析したもの(熊取谷1989)、ほめの対象を分析したもの(金2005)、ほめの談話の特徴を明らかにしたもの(金2007)などが見られる。

一方の否定的評価については、語彙の収集や意味の分類を目的としたものがほとんどであった(悪口の語彙を収集し意味を分類した筒井(1967)や、悪態表現の意味を分類した荒木(1994)、方言における性向語彙¹⁾を分析した室山(2001)など)。いわゆる「悪態」やからかいに関しては、運用面での機能に言及した研究も見られ、攻撃的な側面と、親しみ表す側面があるとされている(星野1974、Pawluk 1989、Boxer&Cortes-Conde 1997)。しかし、当該の発話が、会話の中のどのような状況においてこれらの機能を果たすのかは、明らかにされていない。また、からかいに関しては、女性が連帯感を強めるために利用しているという指摘が見られる(Eder1993)。しかし、否定的評価に関しては、性差による違いを分析した研究は見られない。

そこで、本研究では、性別を統制した実際の会話資料の中から、会話の相手やその行動、発話、認識、および、相手が好意を抱いている人物、ものごとに対する否定的評価の表現を含む発話を網羅的に抽出する。そして、それらのきっかけを分析し、否定的評価の発話がどのような状況でどのような機能を果たすかを明らかにする。

3. 研究方法

本節では、実際の会話の中から否定的評価の表現を含んだ発話を抽出し、そのきっかけを分析するにあたっての方法を述べる。まず、本研究において用いる会話資料の概要を示す。続いて、否定的評価の表現を規定する。最後に、それらの発話のきっかけの分析方法を示す。

3-1. 会話資料の概要

本研究で用いる会話資料は、2003年6月から9月にかけて録音した。非常に親しい同性かつ同年齢の日本語母語話者の大学(院)生が参加した協調的な二者間会話である。会話は、1会話20分程度で、男性ペア、女性ペアとも各10組、合計20組を収集した。会話収集の際には「こんな機会だから言える、普段相手に対して抱いている印象」話題を設定した²⁾。会話の場所は、最もリラックスできる場所として協力者自身に指定させた。会話終了後、フォローアップ・アンケートを実施し、協力者同士の親しさや会話の自然さを確認してある。この会話を、宇佐美(2003、Basic

Transcription System for Japanese: BTSJ)に従って文字化した。その結果、1会話の平均発話文³⁾数は、710.3であった。

3-2. 否定的評価の表現とそれを含んだ発話文の集計の方法

上述の会話資料から否定的評価の表現を含んだ発話文を抽出する。本研究では、以下の表現を否定的評価の表現とする。

- 否定的評価の意味を持った語彙・表現 例) 違う、おかしい、やばい
- 評価のモダリティ(日本語記述文法研究会編2003)の表現のうち、「～ものではない」など否定的な評価を含んだもの 例) そういうこと言うもんじゃない
- 否定形(否定の助動詞「ない」を用いて相手の発話内容を否定するもの、命令形、禁止系、「～んじゃない」という文型) 例) 今ごろ気づいてんじゃない

当該の発話文中の語彙・表現が否定的評価の意味を持っているか否かを判断するにあたっては、「まんざら」という副詞を用いた。工藤(1999)によると、「まんざら」は、「まんざら嬉しくなくもない」のように、二重否定形式と共起してある程度の肯定性を表すのが特徴だが、否定的評価の述語であれば、二重否定でなくてもよいとされている。その例として、「まんざら悪い気がしない」が挙げられている。本研究でも、「まんざら」が持つこの性質を利用し、文中の語彙・表現に否定的評価の意味があるか否かを判断する。

命令形や禁止系は、表現としては行動(停止)要求である。しかし、これらの表現が用いられた場合、その裏には相手に対する否定的な評価を抱えていることが明示的である。そのため、本研究ではこれらも否定的評価の表現として扱うことにする⁴⁾。

以上の表現を含んだ発話を抽出し、発話文ごとに集計した。例1では、ほぼ同じ内容の発話が繰り返しているが、それぞれ1発話文であるため、2つの否定的評価として集計する。

例1 否定的評価の表現を含む発話の集計方法の例。M04の印象を話している場面。

→M03 思いやりが足りない<笑いながら>。

M04 はははははは<大きな笑い>。

→M03 デリカシー不足かな。

- 1) 方言性向語彙とは、「地域社会の成員の生まれつきの性格や日ごろの振舞い、人柄などを評価の観点から捉えて表現する言葉のまとまり」とされている(室山2001:23)。
- 2) 話題を記した紙を封筒に入れておき、会話開始後、任意の時点において封筒を開けるよう依頼した。その話題では話づらい、話題について話すことがなくなった、等の場合には、渡した話題を離れてもよいと伝えた。
- 3) BTSJでは、「実際の会話の中で発話された「文」という意味で「発話文」という用語を用い、基本的な分析の単位とする(詳しくは宇佐美2003を参照)。
- 4) 「悪態」の研究にも、命令形、禁止形を悪態に含める立場(星野1989)がある。

3-3. きっかけの分析方法

上に述べた否定的評価の表現を含んだ発話文のそれぞれについて、発せられた状況を調査するために、「発話のきっかけ」(熊谷1997)に注目する。「発話のきっかけ」は、「どのようなきっかけや刺激によって当該の発話がなされたのか」を明らかにするためのもので、「大きく分けて、特定の外的要因はなく話者が自発的に発した発話、その場の事態に誘発された発話、先行発話に誘発された発話、の3種類」になるとされている(熊谷1997:31)。そのうち、先行発話をきっかけとするものが、誰による先行発話か、話し手に直接向けられた(話し手を「マトモの聞き手」とする)ものかによってさらに分かれ、5つの選択肢になるとされている。本研究では、この5つに「参加者の動作」を加えた以下の6項目を立て、発話のきっかけを分類する(例を続けて挙げる)。

1. 自発的(特定の発話や出来事への反応ではない発話の場合)
2. 事態の推移(できごと、事物、など)
3. 自分に向けられた他者の発話(話し手を「マトモの聞き手」とするもの)
4. 自分に向けられたのではない他者の発話
5. 話し手自身の発話
6. 参加者の動作

例2 自発的なものの例。M04がサークルの後輩に対して、関与が消極的であることを注意したと述べた直後のやりとり。M04は、この問題を解消するためにも部長が地位を明け渡した方がいいということ(1、3)や何もしない方がいいこと(6)を述べている。それに続けて、M03が先日メールで後輩に指示を出したことについて「やらない方がいい」(8、10)と否定的評価の表現を含む発話を述べている。これは、他者の発話やその場で起きた出来事など特定の外的要因への反応ではないため、自発的なものと捉える。

- 1 M04 まーね、それを考えると、やっぱりね、もう、ばって部長が渡した方がいいって、今の位置。
- 2 M03 でも、あれ、前おれだもん。
- 3 M04 いや、だから、な、名前だけは部長で全部あげて、後は下に、あれするぐらいでやったほうがいい。
- 4 M03 あ、いまやってるやってる=。
- 5 M03 =おれもうほとんどなんにもやってないから<笑いながら>=。
- 6 M04 =ほんとになんにもやらない方がいい=。
- 7 M04 =だからー、例えば、お前す、水曜にやったほうがいいとか流してたでしょ？。
- 8 M04 あれも、もうやらない方がいい。
- 9 M03 あー。
- 10 M04 ほんとやらない方がいい。

11 M03 なるほどね。

12 M04 うん。

13 M03 いや、だけどー[強調するように]、ほら4年生の気持ちと同じよ。

例3 事態の推移によるものの例。M03は、M04に対して「怖い」「厳しい」などと否定的な評価の表現を述べている。これらは、筆者が提示した「こんな機会だから言える、普段相手に対して抱いている印象」という話題を見るという事態の推移によってもたらされたものである。

1 M04 [M04紙を見る]〈笑い〉。

→2 M03 早く、熱いー、えーっと、怖い、えー(〈吹出すように大笑い〉)。

→3 M03 まー、怖いのはその練習の厳しさってことだからまあいんだけど、熱い、厳しい、えーー、できる、かな。

例4 自分に向けられた他者の発話をきっかけとするものの例。F02から「あほ」と言われたことがきっかけとなり、F01は、「うるさい」「今ごろ気づいてんじゃない」と否定的評価の表現を述べている。

F01 合宿で毎回爆笑してたのぐらいいか覚えてないんだけど。[この間、F02は笑っている]

F02「F01名」もあほじゃん〈笑いながら〉。

→F01 うっせーよ。[この間、F02は笑っている]

→F01 今ごろ気づいてんじゃないねーよく大きな笑い。[この間、F02は笑っている]

例5 参加者の動作をきっかけとするものの例。M15が共通の知人についての話題を提供した直後に話題の紙を見ようと手を伸ばすM16に対して、M15は「まだ早い」と否定的評価の表現を述べている。M16はここで発話していないため、その動作がきっかけとなって否定的評価の発話が見られたと捉える。

1 M15 じゃ、「人名1」の話でもするか〈2人で笑い〉。

→2 M15 いや、まだ早い(〈笑い〉)だろ〈笑いながら〉。[M16が、話題の紙に手を伸ばしていた]

3 M16 まだ早い? 〈笑いながら〉。

→4 M15 まだ早い〈だろ〉{ 〈 〉 〈笑いながら〉。

「4.自分に向けられたのではない他者の発話」、「5.話し手自身の発話」をきっかけとするものは、4-2で述べるように、今回の資料には見られなかった。以下では、これらの方法による作業の結果を述べる。

4. 結果と分析

本節では、まず、否定的評価の表現を含んだ発話文の抽出結果を示す。次に、それが発せられたきっかけについての結果を数量的に示す。その後、抽出した発話文をきっかけごとに質的に分析し、それらがどのような機能を果たしているか明らかにする。最後に、それらの機能の分布に性差が与える影響を分析する。

4-1. 否定的評価の表現を含んだ発話文の抽出結果

表1に、否定的評価の表現を含んだ発話文の抽出結果を示す。

表1 否定的評価の表現を含んだ発話文の抽出結果

	頻度	%	SD	最大値	最小値	平均
男性	118	62.1	5.36	24	0	5.9
女性	72	37.9	3.84	12	0	3.6
全体	190	100	5.03	24	0	4.8

(最大値、最小値、平均は、一人当たりの数字)

表1から分かるように、全体で190例の発話文が抽出された。男女別に見ると、男性が118例(全体の62.1%)で、女性の72例(全体の37.9%)に比べて多く見られた。頻度に関してt検定を施した結果、有意差は見られなかった($t(38)=1.55, P>.05, n.s.$)。平均値を見ると、1人あたり、6.0回の否定的評価の表現を含んだ発話が見られた。1会話の中で2~3分に一度の割合で見られたことになる。

4-2. 否定的評価の表現を含んだ発話文のきっかけ

続いて、次頁の表2に否定的評価の表現を含んだ発話文のきっかけを示す。

表2 否定的評価の表現を含んだ発話文のきっかけ

	男性		女性		全体	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%
自発的	3	2.5	3	4.2	6	3.2
事態の推移	22	18.6	7	9.7	29	15.3
自分に向けられた他者の発話	85	72.0	60	83.3	145	76.3
参加者の動作	8	6.8	2	2.8	10	5.3
合計	118	100.0	72	100.0	190	100.0

全体を見ると、「自発的」なものが最も少なかったことが分かる(3.2%)。続いて、「参加者の動作」(5.3%)、「事態の推移」(15.3%)の順に多くなり、最も多く見られたのが「自分に向けられた他者の発話」(76.3%)をきっかけとするものであった。このことから、抽出された発話文のうち、自分に向けられた他者の発話や参加者の動作など、相手との相互作用の結果発せられていたものが、80%以上になっていることが分かる。

男女別に見ると、「事態の推移」と「参加者の動作」をきっかけとするものは、男性の方が高い割合で見られた。一方、「自発的」なものと「自分に向けられた他者の発話」をきっかけとするものは、女性の方が高い割合で見られた。独立性の検定の結果、男女間で有意な差は認められなかった ($\chi^2(3)=4.81, P>.05, n.s.$)

4-3. きっかけごとに見た否定的評価の表現を含んだ発話文の質的分析

次に、抽出した発話文をきっかけごとに質的に分析し、その機能を明らかにする。ここで発話の機能というのは、批判や非難、不同意、また助言やあいづちなど、発話がコミュニケーション上において果たす役割のことを指す。以下では、抽出した発話文の機能を分析していくと同時に、それを会話の相手のフェイス(Brown & Levinson 1987)との関連から見ていく。フェイスとは、人間が持つ基本的な欲求であり、他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティブ・フェイスと、他者に邪魔されたくない、立ち入れたくないという欲求であるネガティブ・フェイスがあるとされている。批判や非難、不同意などの機能をもった発話は、相手のポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスの双方を同時に脅かすものと捉えられる。一方で、あいづちや助言などは、相手のポジティブ・フェイスを満たすものと考えることができる。以下、それぞれのきっかけごとに会話例を挙げながら、質的な分析の結果を示す。

4-3-1. 自発的な発話

まず、自発的な発話を分析する。例6(=例2)でM04は、サークルの部長であるM03がメールで指示を出すなど積極的に関わることによって、後輩のサークルへの関わり方が消極的になると指摘し、そのような行動を「やらない方がいい」(8、10)と述べている。ここでM04は6、7、8行目で立て続けに発話し、一般論からM03の個別の問題へと間髪入れずに⁵⁾強い勢いで指摘を展開している。一連の発話には笑いも伴っておらず、ここでM04は、M03に強い調子で注意・忠告をしていたと考えられる。M04の発話がM03を否定的に評価するものであったことは、M03が自己弁護するような発話(13)を続けていることから判断できる。

例6 (=例2)自発的な発話のうち忠告と捉えられるものの例。

- 1 M04 まーね、それを考えると、やっぱりね、もう、ぱって部長が渡した方がいいって、今の位置。
- 2 M03 でも、あれ、前おれだもん。
- 3 M04 いや、だから、な、名前だけは部長で全部あげて、後は下に、あれするぐらいでやったほうがいい。
- 4 M03 あ、いまやってるやってる=。
- 5 M03 =おれもうほとんどなんにもやってないから<笑いながら>=。
- 6 M04 =ほんとになんにもやらない方がいい=。
- 7 M04 =だからー、例えば、お前す、水曜にやったほうがいいとか流してたでしょ？。
- 8 M04 あれも、もうやらない方がいい。
- 9 M03 あー。
- 10 M04 ほんとやらない方がいい。
- 11 M03 なるほどね。
- 12 M04 うん。
- 13 M03 いや、だけどー[強調するように]、ほら4年生の気持ちと同じよ。

自発的な発話と判断されたものの中には、相手のポジティブ・フェイスを脅かすものがほとんどであった。

4-3-2. 事態の推移をきっかけとする発話文

事態の推移をきっかけとすると認定された発話は、全て筆者の提示した話題によるものであった。例7は、筆者の提示した話題を見た直後のやり取りである。引用部冒頭で、F01はF02のこと

5) 文字化資料中の“=”は、発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、全くないことを示す。詳細は、本稿末尾の記号凡例を参照されたい。

を「ばか」と述べている(1)が、これは批判として機能していると考えられる。それは、F02が反発するような反応を示していることや、F01が、この発話の根拠として普段からのF02の様子を述べており(18)、単なる思いつきとは考えられないことなどからである。さらに、それに続いて、F02が中途半端にした作業をF01が肩代わりさせられた(19)ことについて、不満も述べている。これらのことから、1行目の発話は、批判としての機能を持っていると判断した。

例7 事態の推移によるもののうち、批判となっていると捉えられる発話の例。

- 1 F01 「F02あだ名」はねー(うん)、あのねー、別に今だから言うわけじゃないけどね、結構ばかだよ<2人で大きな笑い>。
 2 F02 うそー<軽く笑いながら>。
 3 F01 だって、結構さ、
 4 F02 <ばか?> { < }。
 5 F01 <あの> { }ね、しっかりしてる、しっかりしてるけど<軽い笑い>。
 (12行省略)
 18 F01 でも、結構さー、なんか(<軽い笑い>)、OB用の葉書のさー、やつで、なんか、葉書の、あの印字がさ(うん)、斜めってってもさ(<大きな笑い>)そのままにしたりとかしてさ<笑いながら>。
 19 F01 あたしは何気に、あれは自分で直した<大きな笑い>。[この間、F02は笑っている]
 20 F02 やっぱだめかー<笑いながら>。
 21 F01 うん。

ここに含まれる発話文には、この例7のように相手を批判的に評価するものと、例3のように相手の印象を思いつくままに述べたものが見られた。

4-3-3. 自分に向けられた他者の発話をきっかけとする発話文

続いて、抽出された発話文のうち最も多く見られた、「自分に向けられた他者の発話」をきっかけとするものを分析する。この中には、相手の現実的でない発話、自分に向けられた批判、相手の冗談、相手からの同意要求、相手の語り、相手の失敗談をきっかけとするものなどが見られた。このうち、前3者は、相手のポジティブ・フェイスを脅かす機能を持ち、後3者は、それを満たす機能をもっていると考えられた。以下、例を挙げながら分析結果を示す。

4-3-3-1. 相手の現実的でない発話をきっかけとする発話文

例8では、自衛隊に就職するM11について、M12が通勤時にも自衛隊の制服を着用するのかと質問している(1、2)。このような現実的とは思われない質問に対して、M11は「さすがにそれはない」「浮く」「いやだ」(3、5、6)と批判的に否定的評価の表現を述べている。M11は、初めは軽く笑いなが話していたが、最終的には、発話に笑いが伴わなくなっている。また、声も落ち

着いた調子になっている。これらのことから、一連のM11の否定的評価の表現は、冗談に対する「つつこみ」のようなものではなく、相手に対する批判となっていると判断した。

例8 相手の現実的ではない発話をきっかけとするものの例。

1 M12 で、それを、でも、それを着て、着込んで(うん)、うちからそこまで通うわけ?。

2 M12 その、職場、どこにあんの、横須賀へ?。

→3 M11 いや、す、それはないっしょ、さすがに<軽く笑いながら>。

4 M12 <笑い>見たことないもん。

→5 M11 浮くでしょ、それは<軽く笑いながら>。

→6 M11 朝の新宿とかでやでしょ、そういう人いたら。

4-3-3-2. 自分に向けられた批判をきっかけとする発話文

例9に示すのは、例7に示したやりとりが続くものである。F01がF02のことを「ばか」と述べた(1)ことに始まり、F02が「あほ」と述べ(127)、それに対してF01がさらに「うるさい」「今ごろ気づいてんじゃない」と述べている(128、129)。これらの発話は言い返しであり、悪く言ってきた相手を批判するものである。これは、相手のポジティブ・フェイスを脅かすものであると言える。省略部において「ばか」と言われたことをF02がしきりに気にしていたことや、F01が話している間笑っているF02を批判している(130、131)ことから、F01とF02の両者が発話時点で多少とも気分を害していて、発言の撤回や真面目な対応を期待していたであろうと考えられる。

例9 自分に向けられた批判がきっかけとなっている発話の例。

1 F01 「F02あだ名」はねー(うん)、あのねー、別に今だから言うわけじゃないけどね、結構ばかだよ<二人で大きな笑い>。

(125ライン(約4分)省略。この間、F02は「ばか」と言われたことをしきりに気にしている。話題は、受験、部活、合宿と移行している。)

126 F01 合宿で毎回爆笑してたのぐらいしか覚えてないんだけど。[この間、F02は笑っている]

→127 F02 「F01あだ名」もあほじゃん<笑いながら>。

→128 F01 うっせーよ。[この間、F02は笑っている]

→129 F01 今ごろ気づいてんじゃないねーよ<大きな笑い>。[この間、F02は笑っている]

130 F01 違うよ、それにさ、違うんだよ、だから、あたしが言ってるのをさ、馬鹿笑いしてるあんたがおかし(<大笑い>)んだよ。

131 F01 何がおかしいか分かんないんだよ、大体<軽く笑いながら>。

4-3-3-3. 同意要求や提案をきっかけとする発話文

例10に示すのは、M07がM08のことを、お笑いコンビの「いつもここから」に似ていると話

した直後のやりとりである。以前からM07は「いつもここから」が面白いと話していたが、それをテレビで見たM08は「おもんなかったよ」(2)と、M07の見解に同意しない発話をしている。それを聞いたM07はネタの面白いと感じた部分を再現しながら(7、9)、同意するよう求めている(10)。それでもM08は「なんかくどい」と同意しない(12)。それを聞いたM07は、面白いと感じた動きやネタをさらに紹介し、同意を求めている(13、15)。これに対しても、M08は「いただけない」と述べ、同意していない(17)。このような不同意の発話は、認めてほしいという相手の欲求(ポジティブ・フェイス)を脅かすものである。

例10 自分に向けられた批判がきっかけとなっている発話の例。

- 1 M07「そしてここから」とか、なんかさー〈2人で大き目の笑い〉。
 →2 M08 なんかさ、あれでも、おもんなかったよ、普通に。
 3 M07 え、いや、ちょっとま。
 4 M08 新ギャグやってたんやけど。
 5 M07 暴走族系のやつ?。
 6 M08 そう、そう、そう。
 7 M07 "ブーンブーンブーンブーン",,
 8 M08 あーん。
 9 M07 なんか、"何見て、何見て、何見てんだよー"とか言うやつでしょ?。
 10 M07 や、あれ、すごい、おれ的にはうけたんだけど。
 11 M08 うそー。
 →12 M08 なんかな、くどい、あれ。
 13 M07 え、なんか、じよ、あの、前後入れかわんでしょ?。
 14 M08 そう、そう、そう。
 15 M07 ブーンブーン、なんか"何見て、何見てんだよー、何見てんだよー"。
 16 M08 うん。
 →17 M08 あれはいただけやん、〈ちょっと〉{〈〉}。
 18 M07 〈やー、でも〉{〈〉}なかなかよかったけどなー。

4-3-3-4. 相手の冗談をきっかけとする発話文

続いて、相手の冗談をきっかけとする発話文の例を示す。「もてたい」と述べるM07に対して、M08は新宿2丁目に行くことを提案している。この提案がM07の希望を満たすものではなく、冗談として述べられていたことは、「違う意味でもてる」ということを互いに確認しあったやりとり(6、7)から分かる。このようなM08の提案に対してM07は「危ない」と否定的評価の表現を述べているが、これにはM08も賛同している。これらのことから、ここでの否定的評価の表現は、相手の発話が冗談であることを理解したことを相手に「フィードバックする」(水島2004)機能があると考えられる。相手の意図を理解したことを示している点において、この発話は相手

のポジティブ・フェイスを満たすものだとと言える。

例11 相手の冗談に続いて発せられる発話の例。

1 M07 [咳払い]まー、でもなー、もてたいね。

2 M07 なんか、うはうはしたい。

3 M08 2丁目行ったら？。

4 M07 2丁目？。

5 M08 うん<笑いながら>。

6 M07 それ違う意味でもてるんじゃないの？。

7 M08 うん<笑いながら>。

→8 M07 <笑い><危ないって> { < }。

9 M08 <絶対やばい> { } って、あっこ'あそこ'、ほんと=。

4-3-3-5. 相手の語りをきっかけとする発話文

次に相手の語りをきっかけとする発話文の例を示す。例12は、F06が自分のしていたことを次々と忘れて、別のことをしてしまったという体験を語っている場面である。F06が話している間、F05はあいづちや笑いによって反応を返し、終始聞き手にまわっていることが分かる。11行目でF05は「病気だよ」という否定的な評価の表現を述べるが、直後に再び聞き役に回っている。このように聞き手にまわっているF05による否定的評価の表現は、バックチャンネル+ α (伊藤1993)として機能し、相手の話を聞いていることを示しているのだと考えられる。相手への理解を示している点で、相手のポジティブ・フェイスを満たすものであると言える。

例12 語りの間で発せられる発話の例。

1 F06 すごい、第2弾あってねー(うん)、なんかね、歯を磨いてること忘れちゃって、違うこと始めちゃったの。

2 F05 え[↑]、こうして？。

3 F06 なんかビックリして、あ、それ、でも、自分は磨き終わってたみたいなんだけど(<笑い>)。

4 F05 歯磨き粉残ってた? <笑いながら>。

5 F06 でも<笑いながら>、でもなんか、うちの母親とか、そういう私にはすごく慣れてるからー(うん)、あの一、なんか、私の部屋にコンコンてきて(うーん)、"なんか、なんかやってたんじゃないのー?" って(<笑い>)。

6 F06 "なんか忘れちゃってないかなー"とか言って登場したのね。

7 F06 <笑い>でねー、<下に行って> { < }、

8 F05 <普通じゃない> { } よね<笑いながら>。

9 F06 下に行ってみたら、歯ブラシがおいてあってー(うーん、うんうん)、なんか、歯磨きのキャップも外れたまんまで(<笑い>)、このへ、なんか、だ、散らばってるの、全部が<笑い>

ながら〉。

10 F06 で、アイロンもかけたんだけど(うん)、アイロンもおいてあって(うん)、で、アイロン台も出しっぱなし(うんうんうん)で、なんかね..

→11 F05 〈笑い〉病気だよ、〈それ〉 { 〈〉 〈笑い〉。

12 F06 〈アイ〉{ }ロンやってたんだけどー、歯磨いたんだけどー (〈笑い〉)、もう勉強してんの。

4-3-3-5. 相手の失敗談をきっかけとする発話文

自分に向けられた相手の発話をきっかけとするものの最後に、相手の失敗談をきっかけとする発話文の例を示す。例13は、M10がテストで30点しか取れず、レポートも長すぎて「無理なんだけど」と話している(1)場面である。その様子を聞いたM09は「やばい」と述べているが、この発話は、直後に「がんばれよ」(10)と述べられていることから分かるように、助言として機能していると考えられる。

例13 失敗談に続いて発せられた発話の例。

1 M10 えー、無理なんだけど、普通に。

2 M09 30点 〈笑い〉。

→3 M09 普通にいくと、それやばいよ。

4 M10 あ?。[あくびをしながら]

→5 M09 後期もそんな感じでとるとやばいよ。

6 M10 うん。[簡単に]

7 M09 うん 〈笑いながら〉。

8 M10 いや、でも一、やばいね。

→9 M09 やばいっしょ 〈笑いながら〉。

10 M09 がんばれよ。

4-3-4. 相手の動作をきっかけとする発話文

否定的評価の表現を含む発話文のきっかけとなる事柄の最後として、相手の動作を挙げる。ここには、例5のように相手の唐突な動作がきっかけとなった場合や、以下の例14のように相手がふざけた場合などが含まれる。

例14では、M09の携帯電話に文字を拡大表示する機能があることを知ったM10が、携帯電話に興味を示し、それを手にとって振っている。それに対して、M09は「もういい」「振らなくていい」と否定的評価の表現を述べている⁶⁾(4、5)。繰り返し述べられていることから、相手の行動を批判し、制止しようとしていたのだと判断した。

6) 「いい」は、「しばしば『まだ、もう』などの類の副詞」を伴って「不必要／いらぬ」という意味を表す(山田2000)。

例14 相手がふざけたことがきっかけとなっている発話の例。

1 M09 これ、もっかいもう一回押したら、でかくなるー { < }。

2 M10 <おーいー> { > }。[驚きと共感を示して]

3 M09 <笑い>すごい。

→4 M09 ね、もういい<笑いながら>。

→5 M09 振らんでいいから<笑いながら>。

以上に見たように、否定的評価の表現を含んだ発話文は、きっかけごとに様々な機能を果たしていた。批判や非難(例8、9、14)、不同意(例10)など、相手のポジティブ・フェイスを脅かすようなものと、冗談への応答(例11)バックチャンネル(例12)、助言(例13)など相手のポジティブ・フェイスを満たすものである。続いては、この結果に関して性別による傾向の違いを分析する。

4-4. 否定的評価の表現を含んだ発話文の機能に性差が与える影響

ここでは、以上のように明らかにした発話文の機能について、その傾向に性差が与える影響を分析する。まず、当該の発話文が相手のポジティブ・フェイスを脅かすか満たすかという観点から分析する。次に、発話文の機能ごとに、男女の傾向を確認する。

4-4-1. ポジティブ・フェイスを脅かすか満たすか

表3に、男女別に見た否定的評価の表現を含んだ発話の機能を示す。なお、表3を作成するにあたっては、「事態の推移」をきっかけとする発話は除外し、161の発話のみを示した。それは、本研究が、できるだけ自然な会話における発話の実態を捉えることを企図しているからである。「事態の推移」とは、筆者が提示した「こんな機会だから言える、普段相手に対して抱いている印象」という話題に沿って話す場面を意味し、これを表3に含めることはその目的とそぐわないと

表3 男女別に見た否定的評価の表現を含んだ発話の機能

相手のポジティブ・フェイスを		脅かす	満たす	合計
男性	頻度	81	15	96
	%	84.4	15.6	100
女性	頻度	46	19	65
	%	70.8	29.2	100
全体	頻度	127	34	161
	%	78.9	21.1	100

判断したためである。その結果、思いつくままに評価語を並べた発話(例3)のように相手のフェイスへの配慮と関わらないと考えられるものは除外された。

表3から分かるように、相手のポジティブ・フェイスを脅かす発話文(78.9%)の方が、それを満たすもの(21.1%)に比べて高い割合で見られた。男性の方がその傾向は強く、ポジティブ・フェイスを脅かすものが、満たすものの5倍以上見られた。相手のポジティブ・フェイスを脅かすものの割合は、男性の方が高い(男性84.4%、女性70.8%)のに対して、それを満たすものの割合は、女性の方が高かった(女性29.2%、男性15.6%)。性差に関して独立性の検定を施した結果、5%で有意差が認められた($\chi^2(1)=4.307, P<.05$)。

4-4-2. 否定的評価の発話文の機能の観点から

例に挙げてきたように、否定的評価の表現を含んだ発話文は、様々な機能を果たしていた。以下の表4には、男女別に見た否定的評価の表現を含んだ発話文の機能の分布を示す。表中の「応答」は、冗談への応答と捉えられるもの(例11)、バックチャネルと捉えられるもの(例12)をまとめたものである。

表4 男女別に見た否定的評価の表現を含んだ発話文の機能の分布

ポジティブ・フェイスを		脅かす				満たす			
		批判・非難	不同意	注意・忠告	同意	応答	冗談	助言	
男性	頻度	47	23	8	3	9	3	3	96
	%	49.0	24.0	8.3	3.1	9.4	3.1	3.1	100
女性	頻度	40	5	-	1	16	3		65
	%	61.5	7.7	-	1.5	24.6	4.6		100
全体	頻度	87	28	8	4	25	6	3	161
	%	54.0	17.4	5.0	2.5	15.5	3.7	1.9	100

男女間で傾向の違いが目立つのは、「批判・非難」、「注意・忠告」、「不同意」、「応答」である。「批判・非難」は男性の方が低い割合だが、「注意・忠告」、「不同意」というポジティブ・フェイスを脅かす機能は、いずれも男性の方が高い割合で見られた。一方で、「応答」というポジティブ・フェイスを満たす機能は、女性の方がかなり高い割合で見られた。

以上、本節では、否定的評価の表現を含んだ発話文の抽出結果、そのきっかけ、及び、それらの機能についての質的分析を示した。そして、それらに性差が与える影響も分析した。次節では、これらの結果について考察し、本稿のまとめとする。

5. 考察とまとめ

本研究では、否定的評価の表現を含んだ発話が、どのようなきっかけで発せられるか示した。抽出された発話文の80%以上は、自分に向けられた他者の発話や参加者の動作などの結果として発せられていた。これは、否定的評価の発話が相手との相互作用の中で用いられていることを表している。そして、そのような相互作用における様々なきっかけに応じて、批判や非難(例8、9、14)、不同意(例10)など、相手のポジティブ・フェイスを脅かすようなものと、冗談への応答(例11)バックチャンネル(例12)、助言(例13)など相手のポジティブ・フェイスを満たすものが見られた。

このような機能の違いが生じる要因の1つとして、会話の相手からの期待が挙げられる。そのことを説明するために、例11のように、否定的評価の表現を含んだ発話が相手の冗談に続いている場合、それは、相手が否定的に評価されてしかるべき冗談を言った、ということを理解したことをフィードバックすることになる。つまり、このような場合の否定的評価の表現は、否定的評価の表現を求める相手の期待に応じて発せられたと考えることができる。また、例12のように、相手の語りの最中に否定的評価の表現が発せられていたのは、失敗談に対して、否定的評価の反応を返してほしいという相手からの期待を話者が感じとっていたことの表れだと考えられる。そのため、そこでの否定的評価は、相手の気分を害したり、話を中断させたりすることなく、コミュニケーションが成立していたのだと考えられる。一方で、例6、7、8のように賛同してほしいという様子や否定的評価を受けることを回避したいという様子が伺われる場面では、否定的評価の表現は、相手の期待に反することになる。そのため、これらの場面では、否定的評価の表現を含む発話が、批判や非難として機能したと考えられる。

否定的評価の発話に関して、条件の統制された会話を分析して性差を明らかにした研究は見られなかった。本研究の結果、否定的評価の表現を含む発話が相手のポジティブ・フェイスを満たすか脅かすかということに関して、性別による差があることを明らかになった。その結果を、抽出した発話文の機能ごとに整理して分析した結果、「不同意」、「注意・忠告」というポジティブ・フェイスを脅かす機能が、男性に高い割合で見られることが分かった。一方で、「応答」というポジティブ・フェイスを満たす機能は、女性の方がかなり高い割合で見られていた。これらの結果から、評価にまつわるコミュニケーションのとり方の男女間での違いの1つが指摘できる。会話の相手が同意要求や確認をしてきた際に、否定的評価の表現を用いてそれに同意しなかったり否定したりすることは、男性の方に多いと言える。一方で、女性の場合には、それに同意を示すことが多いか、同意しない場合でも、否定的評価の表現を用いずに示すことが多いと考えられる。また、相手の語りや冗談に対する応答にも、性差が指摘できよう。女性の場合、相手の語りや冗談に対して否定的評価の表現を持って応じるというやりとりが、男性に比べて期待されるの

だと考えられる。そのために、このようなコミュニケーションが、相手のポジティブ・フェイスを満たすものとして、男性よりも多く見られたのだと考えられる。

本研究では、否定的評価の表現を含む、いわば明示的な発話を分析した。しかし、否定的評価の発話には、そのような語彙・表現を用いない非明示的なものも存在する (Goodwin&Goodwin1987、Martin&White2005)。この明示性に関する分布とそれを分ける要因の分析が今後の課題である。

本稿の会話例で用いた記号凡例 (宇佐美2003を一部簡略化して記載)

。	[全角] ⁷⁾ 1発話文の終わりにつける。
”	発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
、	① [全角] 1発話文および1ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。 ②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
・	①複数読み方があるものを漢字で表す場合、特別な読み方で発せられたことを示すために' 'に入れて示す。 ②音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、' 'の中に正式な表記をする。
“ ”	発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を" " でくくる。
?	疑問文につける。
/沈黙 秒数/	1秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。
= =	改行される発話と発話の間 (ま) が、当該の会話の平均的な間 (ま) の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。
< > { < > } < > { } }	同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{ < > }をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{ }をつける。
[]	文脈的情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの最後に記しておく。

7) 宇佐美 (2003) では、検索の際の便宜を図り、各記号は「半角」で統一することを原則としている。ただし、凡例中に [全角] とある記号は、「全角」で表記する。

()	短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、() にくくって入れる。
< >	笑いながら発話したのもや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2人で笑 い>などのように説明を記す。

参考文献

- 荒木雅實.1994.「悪態表現の意味分類」『人文・自然科学』第2号第1巻(拓殖大学論集208)、1-17.
- 伊藤博子.1993.「談話の指導—バックチャネルからの展開—」『日本語学』12巻8号、78-91.
- 宇佐美まゆみ. 2003.「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成13—14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2)(研究代表者：宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、4-21.
- 金庚芬.2005.「会話に見られる『ほめ』の対象に関する日韓対象研究」『日本語教育』124号、日本語教育学会、13-22.
- 金庚芬.2007.「日本語と韓国語の「ほめの談話」」『社会言語科学』第10巻第1号、社会言語科学会、18-32.
- 工藤真由美.1999.「否定と呼応する副詞をめぐって：実態調査から」『大阪大学文学部紀要』第39巻、大阪大学文学部、69-107.
- 熊谷智子. 1997.「はたらきかけのやりとりとしての会話—特徴の束という形でみた「発話機能」—」、茂呂雄二(編)『対話と知』、21-46、東京：新曜社.
- 熊取谷哲夫.1989.「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』2、広島大学教育学部日本語教育学科、97-108.
- 筒井康隆.1967.「悪口雑言罵詈譏私論」『月刊ことばの宇宙』8月号、23-30.
- 日本語記述文法研究会編.2003.『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』、東京：くろしお出版.
- 星野命.1974.「あくたいもくたい考—悪態の諸相と機能—」『季刊人類学』第2巻3号、29-52.
- 星野命. 1989.「マイナス敬語としての敬卑語・罵詈・悪口」『日本語教育』、69号、110-120.
- 水島梨紗. 2004.「発話の連関における疑似批判的コメントの機能と伝達について—『つつこみ』と呼ばれる言語現象とその相互作用—」『国際広報メディアジャーナル』、No.2、53-72.
- 室山敏昭.2001.『「ヨコ」社会の構造と意味』、東京：和泉書院.
- 山田進.2000.「『いい』の意味論—意味と文脈—」『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古希記念論文集—』(ひつじ研究叢書(言語編)第21巻)、125-141、東京：ひつじ書房.

- Brown, P., & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press
- Boxer, D., & Cortes-Conde, F. 1997. Form bonding to biting: Conversational joking and identity display. *Journal of Pragmatics*, 27, 275-294.
- Eder, D. (1993). "Go get ya a French": Romantic and sexual teasing among adolescent girls. In D. Tannen (ed.), *Gender and conversational interaction*. Oxford university press, 17-31.
- Goodwin, C. and Goodwin, M.H. 1987. Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments. *IPrA papers in pragmatics*. 1-54.
- Martin, J.R. and White, P.R.R. 2005. *The language of evaluation*. New York: Palgrave Macmillan.
- Pawluk, C.J. 1989. Social construction of teasing. *Journal for the Theory of Social Behavior*. 19.2., 145-167.